

## コンサルテーション事業報告

**事業名** 重複障害者コミュニケーション支援

**事業代表者** 川住 隆一 (人間発達研究コース)

**対 象** 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校教師、  
関係機関職員

**目 的** 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、コミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲のあり方について、保護者や教員、施設等の職員とともに探っていく。

**主なスタッフ** 川住隆一および川住研究室指導学生

東北大学大学院教育学研究科：中村保和・笹原未来・佐藤彩子・杉浦竜也・  
岡澤慎一

東北大学教育学部：高橋真衣子

### 実施内容

#### (1) 教育相談として対応している事例（5事例）

5事例は、弱視ろう（盲学校中学部）、脳性まひ（養護学校高等部）、アンジェルマン症候群（養護学校中学部）、レット症候群（養護学校高等部、幼児通所施設）の診断を受けている。各々月に1度位の割合で保護者と共に来談しており、研究室やプレイルーム等で対応している。弱視ろう児に関しては、生活行動やコミュニケーションの内容の拡がり、脳性まひ児とアンジェルマン症候群児は、コミュニケーション手段の拡がりが必要な目標である。レット症候群の2例は、移動行動時の様子から如何に意思を読みとり対応するかが大きな課題である。本誌では弱視ろう児の経過について、別に中村が報告する。

#### (2) 仙台市発達相談支援センターとの連携で対応している事例（3事例）

仙台市発達相談支援センターでは、重症心身障害児・者へのコミュニケーション支援事業を行っている。本研究室では、この事業と連携・協力することを通して、在宅重症心身障害者へのコミュニケーション支援を図りたいと考えている。本年は、3事例について、家庭訪問や対象者が通所している施設へ出かけ、センター職員と共にコミュニケーションの手がかりを探り、家族や施設の職員に助言を行っている。本誌では、このうちの一人で、

家族の要請を受けて継続的な係わりを行っている事例の経過について、別に笹原が報告する。

### (3) 病院に長期入院中の事例（6事例）

われわれはこれまで、国立病院重症心身障害児病棟に入院していて、発信手段に大きな制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人5名に対し、当事者間相互のコミュニケーション支援を1～2ヶ月に1度の割合で実施してきている。さらにこのうちの1名に対しては、本人の希望により、パソコン操作により文字での発信を促す取り組みを佐藤が中心となって行っている。強い運動まひが上下肢にあるため入力方法を工夫した後、ひらがな文字入力、単語入力の取り組みを行い、年賀はがきを作成するまでに至っている。

### (4) 養護学校高等部に通学する事例（1事例）

生後早期にウエルド・ニッヒ・ホフマン病に罹患し、養護学校中学部まで訪問教育を受け、高等部に進学して通学生となった事例に対し、1～2ヶ月に1度学校を訪問して本児の様子を観察している。同時に、担任教師の抱えている課題（本年度目標としているパソコン操作に関わる課題）について意見交換をし、また、情報の提供を行っている。

なお、本事例に関しては、小・中学部時代の担任教師らとともに、「発達障害研究（第28巻第4号，2006）」の「特集 重症心身障害児・者とのコミュニケーション」において、本事例のコミュニケーションに関わる教育実践の成果とその意義について紹介している。